様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２２年　５月　２０日現在

研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2007～2009
課題番号：19300084
研究課題名（和文）ユビキタス社会の社会情報学基礎論

研究課題名（英文）　The Basic Theory of Socio-Informatics in the Ubiquitous Society

研究代表者
正村　俊之（MASAMURA TOSHIYUKI）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00209420

研究成果の概要（和文）：
第１に、社会情報学基礎論としてのコミュニケーション論を構築するために「身体」「メディア」「情報空間」という三つのキイコンセプトを導入した。身体を原基的メディアとして位置づけたうえで、身体と各種のメディアによって構成された情報空間がコミュニケーションと相互連関的な構成関係をもっていることを明らかにした。第２に、物質的世界観に基礎をおいた近代的世界観に対置される新しい世界観として情報的世界観を提唱した。

研究成果の概要（英文）：
Firstly、we introduced three key concepts called the "body" "media" "information space" to build the communication theory as the basics theory of Socio-Informatics. The body is the meta media, and various media functions through the connection with the body. Social communication and the information space have mutual and constitutive relations.
Secondly, we proposed an informational view of the world as a new view of the world distinguished by the modern view of the world that put foundations in the material view of the world.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2008 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2009 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
年度			
総　計	9,400,000	2,820,000	12,220,000

研究分野：情報学
科研費の分科・細目：人文社会情報学
キーワード：コミュニケーション、身体、メディア、情報、情報空間、ユビキタス社会

１．研究開始当初の背景
21 世紀における情報社会は「ユビキタス社会」と呼ばれる新たな段階を迎えた。ここで「ユビキタス社会」とは、インターネットに代表される電子メディアとユビキタス・コンピューティングが複合的に作用するように

なった社会を指している。

このような現代の情報社会を研究するための学問として社会情報学が誕生したが、未だ社会情報学のディシプリンが確立されているとは言い難い。社会情報学には、①社会情報学の基礎を提供する「基礎論」、②情報に関わる経験的・実証的な研究を行う「応用論」、③価値的視点を導入して社会と情報のあるべき姿を模索する「規範論」という三つの領域があるが、そのなかでも研究が立ち遅れ、また研究の進展が望まれている分野が①社会情報学基礎論である。

本研究は、このような情報社会の進展および社会情報学の現状を踏まえ、現代の情報社会を射程に入れた社会情報学基礎論を構築するという意図のもとに進められた。

２．研究の目的

ユビキタス社会において社会情報学基礎論が解明すべき問題として次の三つの問題が挙げられる。

まず第１に、新しい情報技術は、場所的な制約を乗り越えるだけでなく、場所に志向し、場所を特定するような性格を孕んでいるが、このような情報技術の革新と普及によって、場所性を有する現実世界と脱場所的な情報的世界の関係はどのようになるのか(リアル／バーチャルの関係)。第２に、物質に人工知能が組み込まれることによって、人間と物質(機械)との間にどのような相互作用が生まれるのか(人間と物質の関係)、そして第３に、物質的世界の知性化に伴って、社会的世界と物質的世界の関係はどのように変化するのか(社会的世界と物質的世界との関係)。

本研究では、このような原理的問題を解明するための前提作業として、コミュニケーション論の再構築を試みた。20 世紀後半に「社会理論のコミュニケーション論的転回」と呼ばれる事態が起こったが、その更なる展開をはかり、上記の問題を解明するための基礎論としてのコミュニケーション論を確立することが本研究の目的である。

３．研究の方法

その目的を達成するために、文献研究をつうじて、従来のコミュニケーション論に内在する問題点を洗い出すとともに、文献・調査研究をつうじて、現代の電子メディアが引き起こす社会的変化を分析した。

第１の点に関しては、従来のコミュニケーション論を五つの系譜(①マス・コミュニケーション論、②通信工学的コミュニケーション論、③記号学的コミュニケーション論)、④メディア論、⑤社会理論としてのコミュニケーション論)に分類し、その歴史的展開を読み解くことによって、残された課題を摘出した。

第２の点に関しては、現代の電子メディアが人と人との情報伝達に役立つだけでなく、多種多様な情報を蓄積し、その膨大な情報を処理しうることに着目し、いかなる情報空間が形成されつつあるのかを検討した。

４．研究成果

三年間の研究をつうじて次のような結果が得られた。

第１に、「社会理論のコミュニケーション論的転回」によってそれまで社会理論の基礎理論に位置づけられてきた行為理論はコミュニケーション論に置き換えられたとはいえ、文献研究をつうじて現代のコミュニケーション理論にも、行為理論を特徴づけていた三つの要素が残存していることが判明した。その三つの要素とは、①個人を分析単位とみなす「主体主義＝個体主義」、②行為者の意図や動機に基づいてコミュニケーションを説明する「心理学的意味論」、そして③行為とその因果的帰結を一対一対応のリニアな関係で捉える「古典的因果論」である。そうした行為論的残滓を払拭するためには、①「自己と他者(個人と社会)の関係」、②「意味と物質の関係」という二つの基本的な問題系に関して、関係主義的な理解に立脚した新しいコミュニケーション論を展開する必要がある。

そこで、社会情報学基礎論としてのコミュニケーション論を構築するために、①「身体」「メディア」「情報空間」という三つの概念をキイコンセプトとして導入し、その理論的な検討を行った。身体こそ、自己と他者、自己と物的対象を媒介する原基的メディアであり、言語、マス・メディア、電子メディアのいずれも身体との接続によって機能する。そして、原基的メディアとしての身体と各種の人工メディアによって構成された世界が情報空間である。社会的情報空間は、コミュニケーションをつうじて構成されると同時に、コミュニケーションを成立させてもいる。本研究では、このような基本認識のもとに、身体・メディア・情報空間に関するさまざまな現象(例えば、身体的な共振性としての情動、情報的リスク、情報社会における監視・管理機能の変化、社会的信頼、信用バブルの崩壊としての金融危機など)を分析した。

第２に、物質的世界観とは異なる世界観として情報的世界観を提唱した。近代科学が物理学をモデルにしていたように、近代的世界観は、物理学の対象であった物理的世界観を基礎にしており、その構造的特徴は、近代社会の構造的特徴と照応していた。近代社会は、個人であれ、国家であれ、社会を構成するシステムの内部と外部が厳格に分離されるが、このような近代社会の構造的特徴は、物質的世界を構成する物質においては内部と外部

が厳格に分割されるという特徴と重なっていた。しかし、情報化とグローバル化が進展した現代社会では、個人であれ、国家であれ、その内部(自己)と外部(環境)を厳格に分割することが困難になっている。同じ物質が同時に二つの場所を占めることができないのとは対照的に情報は、システムの内部と外部、自己と環境のいずれにも存在することが可能である。現代社会における内部と外部の境界的曖昧さは、システムの内部と外部を越境する情報的作用――ただし、いずれの情報も情報空間の内部に位置している――に関連していると考えられる。このことは、現代社会の情報化とグローバル化が物理的世界観を基礎にした近代的世界観に代わる新しい世界観としての情報的世界観の確立を要請していることを示唆していると考えられる。

以上のような本研究の研究成果は、2010年秋に一冊の単行本(『コミュニケーション理論の再構築――身体・メディア・情報空間』(仮題)として勁草書房から刊行される予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１２件）

１．遠藤薫、「インターネットと流行現象―＜熱狂＞はどのように生まれるか」『日本情報経営学会誌』、査読有、31-1 巻、2009年、3-12
２．遠藤薫、「ネットは０９年衆院選をどう報じ、どう論じたか」、『Journalism』(朝日新聞社)、査読有、11 月号、2009 年、42-55
３．遠藤薫、「リスク・リスク問題・リスク社会」、『学習院大学法学会雑誌』、査読無、44 巻２号、2009 年、49-68
４．山内志朗、「中世哲学と情念論の系譜」、『西洋中世研究』、査読有、1 巻、2009 年、75-86
５．SIBATA,Kuniomi、「The internet is not a Highway to the “Promised Land,” but rather a Pathway to an Actual Community: Employment and Participation for People with Disabilities in Japan」、『Journal of Socio-Informatics』、査読有、Vol.2 No.1、2009 年、115-129
６．正村俊之、「ブログが生み出す新民主主義」、『月刊公明』、査読有、11 月号、2008 年、8-13
７．遠藤薫、「リスク社会と監視社会―安全・安心のパラドックス」、『学術の動向』、査読有、11 月号、2008 年、29-34
８．山内志朗、「ネット社会と〈天使的〉コミュニケーション」、『文学』、査読有、9 巻 6 号、2008 年、74-81
９．大黒岳彦、「システムとしての情報社会」、『明治大学社会科学研究所紀要』、査読有、47 巻 1 号、2008 年、103-114
１０．柴田邦臣、「インターネット・コミュニティ・パスウェイ―障害者のICT利用と社会参加」、『社会情報学研究』、査読有、第 12 巻（1）、2008 年、19-36
１１．伊藤守、「メディア相互の共振と社会の集合的沸騰」、『現代思想』、査読有、vol.36-1、2007 年、146-159
１２．大黒岳彦、「映像とコミュニケーション―ルーマンとバルトの論争を手掛かりにしつつ」、『東北哲学会年報』、査読有、No.23（別冊）、2007 年、93-103

〔学会発表〕（計１１件）

１．正村俊之、「ジンメル理論の革新性――デュルケーム、ウェーバーとの関連において」、東北社会学研究会・ジンメル研究会・合同大会シンポジウム「21 世紀に蘇るジンメル理論」、2009 年 10 月 24 日、東北大学
２．遠藤薫、「2008 年米大統領選挙とメディア沸騰―間メディア社会のカリスマ」、日本学術会議社会学委員会メディア・文化研究分科会シンポジウム「メディアと選挙」、2009 年 7 月 23 日、早稲田大学
３．遠藤薫、「社会情報学のアクチュアリティ」、ICTフォーラム 2009「IT社会の進化とIT関連学会の役割」、2009 年 6 月 6 日、東京国際フォーラム
４．遠藤薫、「ネット社会の変化―政治意識をめぐって」、東京大学COEシンポジウム「ユビキタス社会におけるネット利用の国際比較・ワールドインターネットプロジェクトの 10 年」、2009 年 2 月 19 日、東京大学
５．柴田邦臣、「障害者とインターネット支援の再考―社会に参加するメディアとして」、日本福祉のまちづくり学会大会、2009 年 8 月 23 日、帯広とかちプラザ
６．SIBATA,Kuniomi, New form of employ-ment and Information Communication Technology for people with disabilities in Japan, The 25Th Annual pacific Rim International Conference on Disabilities, 2009/05/05, Hawaii Convention Center
7. 正村俊之、「リスク社会論と社会情報学の接点」、日本社会情報学会（JASI＆JSIS）合同大会シンポジウム「リスク社会における社会情報学」、2008 年 9 月 13 日、東京大学
８．遠藤薫、「グローバル化する情報社会と

情報通信の変容」、第25回国際コミュニケーシ・フォーラム「情報化社会の未来は開けるのか」、2008年11月1日、秋葉原コンベンションホール
９．柴田邦臣、「社会参加するケータイ―移動するメディアから、外出を促すメディアへ」、日本社会情報学会　第12回全国大会、2008年9月12日、東京大学
１０．遠藤薫、「間メディア社会における〈流行〉過程―モノ・コト・情報」、日本情報経営学会第55回全国大会基調講演、2007年11月3日、愛知学院大学
１１．柴田邦臣、「ケータイと『安全』―メディア社会と福祉社会の交錯から」、第12回日本社会情報学会（基調講演と討論）、2007年9月8日、名古屋大学

〔図書〕（計１５件）
１．伊藤守（共著）、法政大学出版会、『触発する社会学』、2010年、195-226ページ
２．柴田邦臣（共著）、ミネルヴァ書房、『社会学のつばさ：医療・看護・福祉を学ぶ人のために』、2010年、168-186ページ
３．山内志朗（共著）、東北大学出版会、『空間と形に感応する身体』、2010年、287-313ページ
４．正村俊之（単著）、有斐閣、『グローバリゼーション』、2009年、224ページ
５．遠藤薫（単著）、勁草書房『聖なる消費とグローバリゼーション―社会変動をどうとらえるか１』、2009年、258ページ
６．遠藤薫（単著）、勁草書房、『メタ複製技術時代の文化と政治―社会変動をどうとらえるか２』、2009年、234ページ
７．山内志朗（共著）、岩波書店、『哲学史の哲学』、2009年、231-254ページ
８．伊藤守（編）、ミネルヴァ書房、『よくわかるメディア・スタディーズ』、2009年、227ページ
９．柴田邦臣（共著）、ミネルヴァ書房、『よくわかるメディア・スタディーズ』、2009年、178-179ページ
１０．正村俊之（単著）、東京大学出版会、『グローバル社会と情報的世界観』、2008年、278ページ
１１．遠藤薫（編著）、東京電機大学出版局、『ネットメディアと〈コミュニティ〉形成』、2008年、290ページ
１２．山内志朗（単著）、岩波書店、『〈畳長さ〉が大切です』、2007年、152ページ
１３．伊藤守（共著）、慶應義塾大学出版会、『テレビジョン解体／日本記号学会編（運動、情動、身体）』、2007年、54-62ページ
１４．遠藤薫（編著）、東京電機大学出版局、『間メディア社会と〈世論〉形成―TV，ネット，劇場社会』、2007年、1-173、300-318ページ
１５．大黒岳彦（単著）、春秋社、『謎としての“現代”―情報社会時代の哲学入門』、2007年、371ページ

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
正村　俊之(MASAMURA TOSHIYUKI)
東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：00209420

(2)研究分担者
遠藤　薫（ENDO KAORU）
学習院大学・法学部・教授

研究者番号：70252054

(3)連携研究者
山内　史朗（YAMAUCHI　SIRO）
慶應大学・文学部・教授

研究者番号：30210321

(4)連携研究者
伊藤　守(ITO MAMORU)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：30232474

(5)連携研究者
大黒　岳彦（DAIKOKU TAKEHIKO）
明治大学・情報コミュニケーション学部・
教授

研究者番号：30369441

(6)連携研究者
柴田　邦臣（SHIBATA KUNIOMI）
大妻女子大学・社会情報学部・専任講師

研究者番号：00383521